

○ねぎの栽培上の特性

- ・ 過湿に弱い
- ・ 酸性に弱い
- ・ 高温で根の活性が落ちる
- ・ 生育期間が長い

○畑選び・栽培のポイント

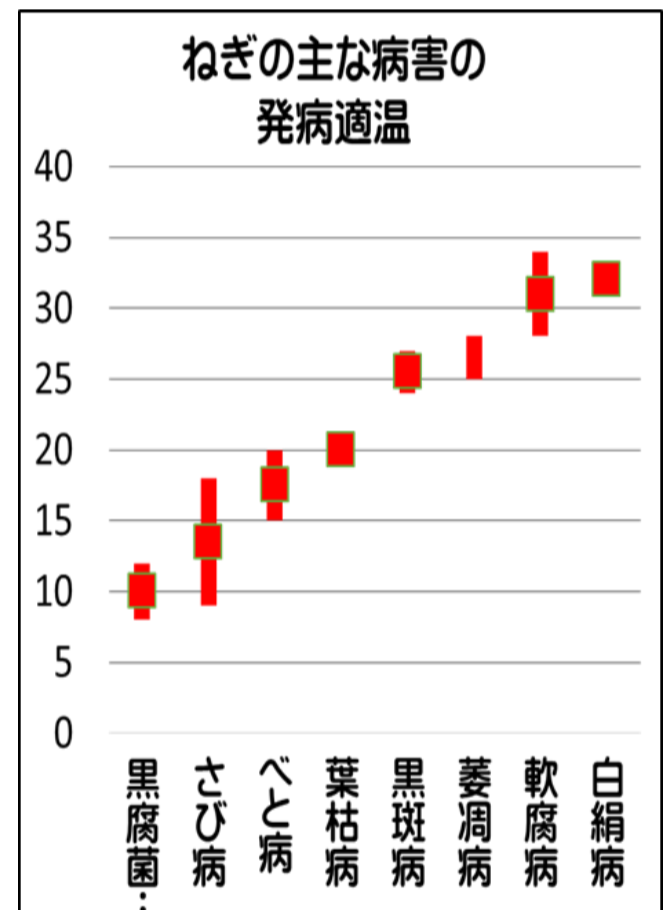
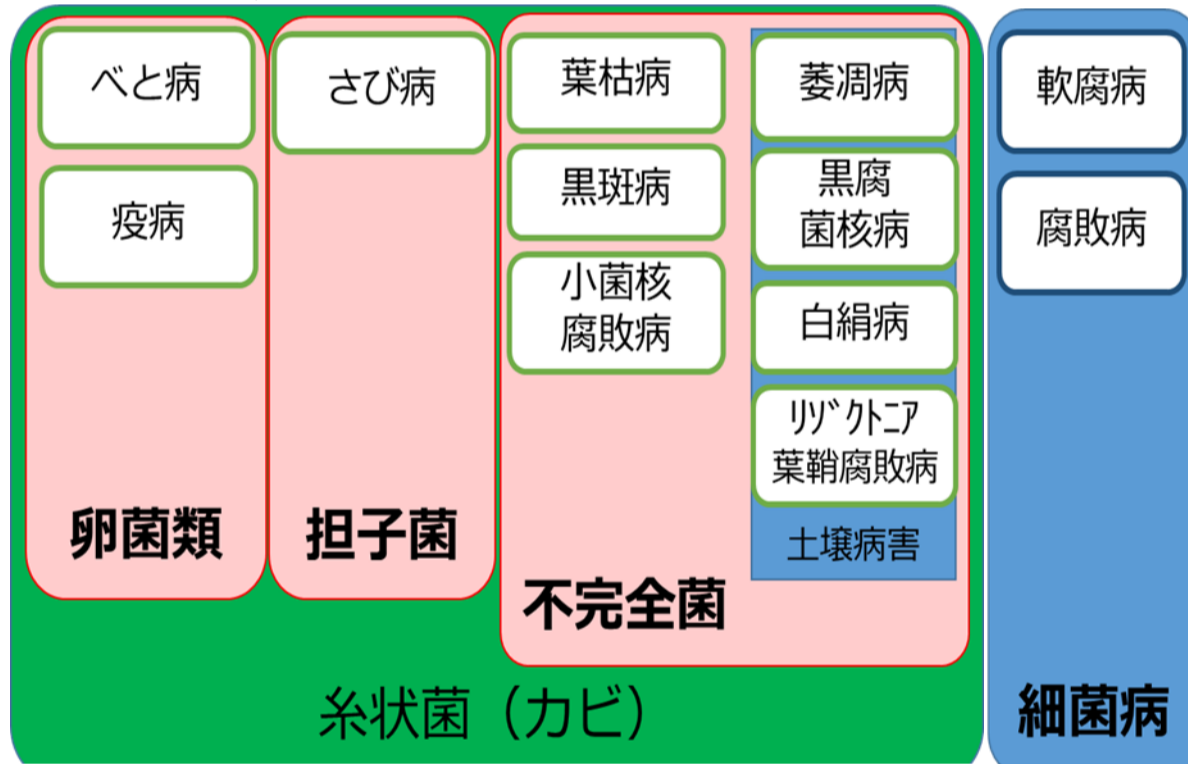
- ・ 水はけが良い
- ・ 排水先がある
- ・ 日当たりがよい
- ・ 作土が深い
- ・ 連作を避ける
- ・ 病害虫が発生しにくい環境（周辺の作物、風通しなど）
 - ▶ 輪作を行い、病害虫が出始めたら作物転換を考える。病害虫の被害がなくても3年までが理想。
 - ▶ 病害虫（特に土壌病害）の密度が高まらないようにする。

○土づくりと施肥

- ・ つくば市の畑は火山灰土壌が一般的
 - ▶ 雨で窒素成分が流れやすい
 - ▶ 酸性化しやすく、リン酸が土壌に吸着されて効きにくい。
 - ▶ 土寄せした土が崩れやすい（襟元がボケやすい）。
- ・ 定植前には、土づくり（土壌診断、たい肥施用、深耕、土壌改良等）、適正な肥培管理（適切な施肥等）、畑の環境にあわせた耕作（日当たりや風通しの確保、畝の向き、排水対策等）を行う。
- ・ ねぎは、高温では根の活性が落ちて、土壌中の肥料成分を吸収できないため、盛夏前の施肥や秋口の追肥などを生育状況に応じて適切に行う。

○主な病害

- ・ 気候により発生する病害が変わる（涼しくなると、収まっていたべと病やさび病が発生しやすくなる）。
- ・ 病原菌の種類によって効果のある薬剤や対策が異なる。



○主な害虫

	ネギアザミウマ	ネギアブラムシ	ネギハモグリバエ	タネバエ・タマネギバエ	ネダニ	シロイチモジヨトウ	ネギコガ
害虫							
被害							

・ 害虫は、一般に高温・乾燥で多発しやすい。本年（R5）の夏～秋季はいずれの害虫も多発傾向。

○薬剤防除の前に行う対策

- ・畑を病害虫が発生しにくい環境にする。(排水対策、風通し、日当たり改善、周辺の除草など)
- ・病原菌や害虫を持ち込まない。(健全苗の使用、汚染土壌を持ち込まない、畑周辺の衛生管理等)
- ・作型にあった品種や耐病性品種を利用する。
- ・病害虫が広がらないよう、発生している畑は管理作業を最後に、作業後は機械等をよく洗浄する。

○薬剤による防除対策

- ・予防と早期防除が重要。(まん延したり、害虫が大きくと育つと効果が出にくい)
- ・薬剤が効かなくならないよう、作用機構が異なる薬剤を組み合わせ、ローテーションで防除する。
- ・効果の低下を感じたら、薬剤の組み合わせを変える。特に、世代交代の早いアザミウマやハモグリバエなどの害虫は、抵抗性が発達しやすいので、効果の確認が大切。
 - ▶ アザミウマは、紙の上で葉をたたいて落ちた虫を観察すると生息を確認しやすい。ハモグリバエの新系統は被害を受けた葉の薄皮を剥くと幼虫を確認しやすい。
- ・散布間隔は病害虫の発生に応じて調節し、予防対策が後手に回らないよう注意する。薬剤や気象条件等により効果の持続期間は異なるが、一般に1週間から10日程度は効果の持続が期待できる。
- ・薬剤散布では、基本的に展着剤を加用する。
- ・生育状況に応じて十分な液量を用意し、かかりムラが出ないように、丁寧に散布する。
- ・農薬は、散布後に一度乾けば一定の効果があるように製剤されているので、降雨の合間の防除では乾くかどうかを判断する。
- ・農薬の希釈は、展着剤から乳剤、水和剤など、溶けやすい剤から溶けにくい剤の順に加えると均一に溶けやすい。展着剤・乳剤・水和剤の頭文字でテ・ニ・スなどの語呂合わせ。
 - ▶ 農薬の剤型には、水に溶けるよう乳化剤を加えた乳剤、成分を付着させた粉を濁らせて散布する水和剤、水和剤を更に細かい粒子にして液体に混ぜたフロアブル剤などがある。乳剤の乳化剤は溶けやすくする効果があるが、濃度が高くなると薬害のリスクが高まる。
- ・希釈した剤は、当日中(希釈後2時間程度までが望ましい)に散布する。時間が経った場合には、よく攪拌して、濃度を均一にする。

○薬剤選びと注意点

- ・必ず、「ねぎ」または「野菜類」に登録されている農薬を使用し、ラベルをよく読んで定められている使用基準や注意事項を守る。
 - ▶ 使用基準は、農産物が食品衛生法の残留基準値を上回らないことの他に、効果や薬害、使用者の安全、環境への影響・残留等を考慮して設定されている。
- ・農薬の商品名が異なっても同一成分が含まれているものがあるので、有効成分ごとの総使用回数に注意する。
- ・ラベルに記載されている適用病害虫は、効果が確認されたものが記載されているが、抵抗性や耐性がつく場合があるので、使用後は効果を確認し、薬剤選定の参考にする。
- ・浸透性をよくする展着剤は、薬害の懸念があるため、組合せに注意する。
- ・夏期の高温は薬害を生じやすく、散布者の健康への負荷も大きいので、比較的涼しい時間帯に行く。
- ・複数の農薬の混用は、薬害のリスクが高まり、使用者の自己責任で行う。混用事例などがあるので販売店等に相談するとよい。一般に、混用は3種類程度までが無難であり、乳剤同士を混用すると薬害のリスクが高まる。
- ・残液が生じないように計画的に調製・使用し、空容器は適切に処分する。空容器は3回以上洗浄する。
- ・散布器具やタンクは残液が残らないように、よく洗浄する。

○雑草防除

- ・雑草対策は後手に回ると雑草が成長し、多くの労力がかかるので、先手先手の対策が大切。
- ・除草は、物理的な防除(草刈り、中耕等)、茎葉処理剤、土壌処理剤などを組み合わせるとともに、雑草の種類に応じて選択性の除草剤などを上手に活用して行う。
- ・雑草が大きくなってしまった場合は、草刈りなどを行ってから茎葉処理剤を用いるなど、対策を組み合わせる。
- ・除草剤を使用する場合は、病害虫と同様にラベルをよく読んで、使用基準や注意事項を守る。
- ・同じ除草剤を連続で使用すると、効きにくい雑草が残るので、系統の異なる除草剤を組み込んだり、ローテーションで使用するなどの工夫も必要。